瀚海・海風考

——邊塞詩の「海」字の解釋をめぐって——

植木久行

(1) 唐詩の「瀚海」の解釋

唐詩のなかの、いわゆる邊塞詩は、豊かな異國情緒（エキゾチズム）と西域の廣漠たる風土を詠みこむことによって、斬新な一分野を形成したとされる。特に北方や西方の荒涼とした沙漠地帶は、秦漢以來、異民族との激戰の舞臺としてしばしば歌われる。さらに吐谷渾や吐蕃の根據地に近い青海（青海省）附近も主要な戰場となり、邊塞詩のなかに散見する。次に引く岑參と王維の詩を通してなじみ深い「瀚海」という言葉は、「沙場」[1]などとともに、內地から遠く離れた塞外の風土を表わす語彙として獨自のイメージに富んでいる。

瀚海闌干百丈冰　愁雲慘淡萬里凝（岑參「白雪歌、送武判官歸京」）

瀚海經年別　交河出塞流（王維「送平淡然判官」）

前者は『唐詩三百首』のなかに、また後者は『唐詩選』のなかにそれぞれ收められて、いずれも廣く知られた詩句である。岑參の「瀚海」に對する先行諸注は、たとえば鹽谷溫『唐詩三百首』（書籍文物流通會）の「內蒙古及び西域

地方に在る大沙漠をいふ」のように、ほとんど〝大沙漠〟を意味する言葉として解釋されている。最近刊行された陳鐵民・侯忠義共著『岑參集校注』（上海古籍出版社）や張輝選注『岑參邊塞詩選』（人民文學出版社）は、ともにこの詩を天寶十四載（七五五）の作と推定し、大沙漠の意とする。つまり、作者が北庭節度使封常清の屬官として天山山脈の北側にあるジムサ（北庭節度使の治所）、もしくは、ジムサの西方に位置する輪臺（ウルチム付近）にいた時の作と考えたわけであろう。武漢大學中文系古典文學教研室選注『新選唐詩三百首』には、「戈壁灘上冰雪封凍的壯闊景象」とある。戈壁灘（ゴビタン）とは、大小の小石が砂礫とまじりつつ、果てしなく廣がる荒涼たる沙漠の一種、沙（すな）沙漠とは異なるが、いずれにしても〝沙漠〟の意味であることには變わりがない。『岑參集校注』では、瀚海の位置について、

大沙漠、東起興安嶺西麓、西盡天山東麓、自東北至西南綿延二千公里、以浩瀚如海、故名。此指西域廣漠之地。

と述べている。つまり、東北の興安嶺山脈から西南の天山山脈に至る二千キロの細長い廣漠たる塞外の地を指すと考えたわけである。

これに對して、王維の詩の「瀚海」については、實は定説がない。岑參の詩も、この詩も、ともに對句構造であることを考えれば、岑參の詩が「愁雲」に對する普通名詞、王維の詩が「交河」（天山山脈に發して、トルファン盆地を流れる川）に對する固有名詞として用いられていると考えてよい。參考として前野直彬『唐詩選』（岩波文庫）の説明をあげると、

いまの外蒙と新疆省（ママ）との境のあたりにある湖の名、もしくはバイカル湖のこととともいい、また大沙漠を海にたとえ、こう名づけたのだともいう。

とある。このように同じ言葉でありながら、一方はほとんど〝大沙漠〟の意味で統一され、他方は定説を得られないまま、諸説が列擧されているのが現狀である。この奇妙な現象は、瀚海なる言葉が時代によって固有名詞から普通名

詞へと轉換する特殊な言葉であり、ちょうど唐代がその轉換期にあたっていることと關連するだろう。

(2)「瀚海」の解釋の史的變遷

瀚海という語は、『史記』匈奴傳・衞將軍驃騎列傳、もしくは『漢書』衞青霍去病傳に見える。前漢の驃騎將軍霍去病は、代郡（山西省北部）を二千里あまり出て匈奴征伐に赴き、匈奴の左賢王と戰い、漢の軍は七萬餘の首級をあげて大勝した。それで霍去病は狼居胥山で天を祭り、姑衍（こえん）山で地を祭り、「翰海に臨んで還」ったという（匈奴傳）。この翰海は、岑參らの詩の瀚海と音通する。三國魏の如淳は「北海の名」と注し（匈奴傳、『史記集解』所引）、北魏の崔浩は、より詳しく「北海の名。群鳥の羽を解く所。故に翰海と云ふ」と述べている（衞將軍驃騎列傳、『史記索隱』所引）。唐の開元二十四年の自序をもつ張守節の『史記正義』には、

　　按、翰海自一大海名。群鳥解羽伏乳於此、因名也。

とあり（匈奴傳）、「一大海の名」とするが、名稱の由來は崔浩の說と同じく、翰の字義〝鳥の羽〟を生かして解釋したものである。いわゆる『史記』三家注に關する限り、北海、もしくは北の一大海を意味し、塞外の地、もしくは大沙漠の意とする解釋はまだ生まれていない。晉の張華撰『博物志』卷二に、

　　漢（一作漠）北廣遠、中國人尠有至北海者。漢使驃騎將軍霍去病北伐單于、至瀚海而還。有北海明矣。

とあるが、これも如淳・崔浩の說と同じである。ちなみに、梁の虞羲作「詠霍將軍北伐」詩に、

　　飛狐白日晚　瀚海愁雲生

とあるが、李善注には如淳の說を引用する（『文選』所收）。

その後、『魏書』や『北史』の蠕蠕傳に「瀚海」の語が用いられるが、藤田豐八はバイカル湖に比定する（平凡社

『東洋歴史大辞典』カンカイの條)。

一方、一九六五年新編本『辞海』では、瀚海の位置は一定せずとして、一つは『史記』『漢書』にみえる「翰海」と同じく、もう一つは蒙古高原の北境、バイカル湖ではないかと推定する。要するに、『史記』の翰海が本來、どういう意味であるかはさておき、六朝時代、翰(瀚)海は壓倒的に「北海」という説が強く、歴史書の用例もほぼその延長上の解釋に基づいていることがわかる。

瀚海は唐代になって、なぜ西北の塞外の地に横たわる大沙漠という意味を持つようになったのだろうか。ここで、先行諸説[2]を參照しながら字義の變遷に關する二、三の要因を指摘してみたい。

(1)將軍李勣が太宗の命を受けてトルコ系の薛延陀(せつえんだ)を制壓すると、その統制下にあった回紇(ウイグル)をはじめとする鐵勒の諸部が歸屬し、この結果、ゴビ沙漠の北まで唐朝の支配下に入ることになった。太宗の貞觀二十一年(六四七)には、漠北の回紇部に瀚海都督府を設置し、部族の酋長を都督に任じて間接統治を行なった(羈縻州)。高宗の龍朔三年(六六三)には、薛延陀の根據地オルコン河の流域に置かれていた燕然都護府を南の回紇部に移して、名を瀚海都護府に改め、漠北の諸羈縻府・州を支配させた。この瀚海都護府は、六年後の總章二年(六六九)、安北都護府と改名されることになる。この場合の「瀚海」は、塞北にある特定の湖を指すのではなく、明らかに塞北の蒙古一帯を廣く指す用法である。前引の『辞海』では、その管轄區域を、今の蒙古人民共和國およびソ連のシベリア南部一帯とする。瀚海が唐代、塞北の廣大な地域、特に沙漠地帶を總稱する言葉として理解されるようになるのも、いわば自然のなりゆきであった。

(2)天山山脈の北を管轄する北庭都護府の本據地庭州(新疆ウィグル自治區のジムサ)には、〃瀚海軍〃が設置されていた。『舊唐書』卷40、地理志に、

瀚海軍、開元中、蓋嘉運置在北庭都護府城內。管鎭兵萬二千人、馬四千二百匹。

とある。『元和郡縣圖志』卷40、庭州の條によれば、長安二年(七〇二)、北庭都護府が置かれ、開元二十一年(七三三)、北庭節度使となり、突騎施・堅昆・斬啜等の異民族に對する防備を掌り、「瀚海軍・天山軍・伊吾軍を管」したという。この瀚海も、霍去病の故事への連想はあるかも知れないが、實質的には特定の湖ではなく、むしろ廣漠たる大沙漠を意味する用法であろう。岑參は瀚海軍の置かれた庭州に實際住んでおり、瀚海軍に對する知識も當然深かったはずである。岑參詩の「瀚海」に對する諸家の注が〝大沙漠〟で統一されているのも、この意味で興味深い。また岑參の「封大夫(封常清)に陪して瀚海亭に宴して納涼す」と題する詩には、

軍中乘興出　海上納涼時

の句がある。『岑參集校注』では、「疑亭近湖泊、故云」と解するが、たとえその場合でも、「北海」や「一大海の名」であるはずはない。瀚海は固有名詞から普通名詞化しているのである。

(3)『舊唐書』卷一五四下、突厥傳には、その領域を「北は瀚海に至る」とあり、フランスの中國學者シャヴァンヌは〝蒙古沙漠の西北部〟と解しているという(前引『東洋歷史大辭典』カンカイの條)。『舊唐書』は五代・後晉の劉昫(りゅうく)の撰ではあるが、おそらく唐代の史料に基づいて記述したものであろう。前引の『辭海』の說によれば、唐代の「瀚海」は蒙古高原大沙漠以北、およびその西にあたる今のジュンガル盆地(新疆ウィグル自治區北部の沙漠)に至る廣大な地域の泛稱という。

(4)六朝後半以降、「翰海」が一般に「瀚海」と書かれるようになり、少くとも表面的な字義においては、〈鳥の羽〉ではなく、〈浩瀚—廣大さ〉を意味する漢字が上にくるようになった。このことも、あるいは〝鳥の休息する湖、もしくは海の名〟から廣漠たる塞外の地(大沙漠)を表す語彙へと容易に移行させる要因となったかも知れない。

このように見てくると、唐代の瀚海は、少くとも歴史關係の用語としては、もはや特定の一つの海、もしくは湖の意として解することはできない。しかし、唐詩等の文學用語としては、傳統性・古典性を重んずる傾向が強いため、霍去病の影響を濃厚に受けることになる。この結果、歴史用語のように一概に〝大沙漠〟の意味として捉えることはできない。漠然と塞外の湖の名として使ってもさしつかえないからである。もちろん、塞外の地に廣がる浩瀚たる大地（沙沙漠・ゴビタン）等を指す用法が次第に主流となっていくが……。

(3) 「海」字の意味の多様性

瀚海が複雑な意味を包含できるのは、實は海という字の、意味の多様性に負うところが大きい。段玉裁の『說文解字注』に、

凡地大物博者、皆得謂之海。

とある說によれば、およそ廣大さ・豐饒さを廣く意味する言葉である。たとえば、物産の豐かな土地を「陸海」と呼ぶ例などは、プラスの方向の解釋であるが、逆に荒涼として果てしない大地をも、もちろん「海」と呼ぶことができるわけである。これは、いわばマイナスの方向である。そしてこの場合、詩文で頻用される「四海」という言葉と密接に關連することになる。古代的世界觀によれば、天下（全世界）は四方を海によって取りかこまれているとされた。いわゆる中原と呼ばれる內陸部で文化を發達させた漢民族にとって、海は世界のはてにあるなじみの少ない存在であった。『爾雅』卷6、釋地によれば、いわゆる九州の外の極遠の地に、四極→四荒→四海の地がそれぞれ同心圓狀に分布するとし、「九夷・八狄・七戎・六蠻、これを四海と謂ふ」とある。つまり、四海とは、四方の最も極遠の地にある、異民族の雜居する土地、という意味である。この說は、『詩經』小雅「蓼蕭（りくしょう）」の小序「澤及四海也」の鄭箋に、

九夷・八狄・七戎・六蠻、謂之四海。國在九州之外。

云々とある説と同じであり、また『周禮』卷14、調人の鄭玄注に「九夷・八蠻・六戎・五狄、これを四海と謂ふ」とあるのとほぼ同じである。ここでは、海という字が必ずしも四方の海、もしくは塞外の湖を意味しない、という點に注意したい。(3)

さらにこの説と關連するものとして、『荀子』王制篇にみえる「北海」「南海」「東海」「西海」の使用例がある。たとえば、「北海には則ち走馬と吠犬あり。然り而して中國はこれを畜使す、云々」とあり、王先謙の『荀子集解』卷5に引く唐の楊倞の注に、

海謂荒晦絶遠之地、不必至海水也。

とある。つまり、これは漢民族の住む〝中國〟と異民族の住む北海・南海・東海・西海との對比的な用法である。今日でも、極遠の地を「海角天涯—hǎi jiǎo tiān yá」というが、その用例とも近い。唐の崔湜「大漠行」の、

南山木葉飛下地　北海蓬根亂上天

の句にも注意したい。蓬は一般に北方の邊境地方、特に沙漠地帶に分布することを考えれば、この北海は塞外の湖や海とするよりも、むしろ塞外の地、もしくは北方の沙漠の意味として捉えるべきであろう。(4)詩題の「大漠行」も、これを裏づける。ちなみに、曹植の「泰山梁甫行」という樂府詩は、次の通りである。

八方各異氣　千里殊風雨
劇哉邊海民　寄身於草野
妻子象禽獸　行止依林阻
柴門何蕭條　狐兎翔我宇

詩中の「邊海の民」の「邊海」に對して、黄節は『爾雅』や楊倞の注等によって「邊遠を謂ふのみ」（『曹子建詩注』巻2）と解している。また伊藤正文『曹植』（岩波詩人選集）の注にも、「賤山賤の苦しい荒涼たる生活を歌う」ものであり、邊海は「黄節のいうごとく、海は晦（くらい）の意で、絶遠の地をさすのであろう」とある。瀚海の瀚を〝浩瀚（廣大）〟の意味に解するならば、瀚海という語が塞外の地に廣がる〝荒涼僻遠の地〟を意味する言葉に變貌するのは、傳統的な「海」字の意味に照らして考えてみても、ごく自然の筋道であったわけである。

「四海」が異民族の雜居する四方の極遠の地と解されるのは、海が「晦」に通じるからでもある。吉川幸次郎「森と海」[5]や前野直彬『風月無盡―中國の古典と自然―』の「海」字の條等の先行論文を參照しながら、海字の意味を考えてみたい。漢の劉熙撰『釋名』釋水の條に、

海は晦なり。穢濁を承くるを主どり、其の色黑くして晦ければなり。

とある。これは諸河川のはきだめとしての海の色に着目したものであるが、『莊子』逍遙遊篇の「北冥（一作冥）に魚有り、その名を鯤と爲す」という「北冥」の冥が海と同意であることを思い起こさせる。冥は「光がなくて暗い」という意味を持ち、北冥とは宇宙のはてにある暗黑の大海とでもいえようか。

〈海は晦なり〉とする説には、實は文化・教育の方面から關連づけた見方もある。『太平御覽』巻36、地の上に引く犍爲舍人の注に、「晦冥無識にして、教誨すべからず。故に四海と曰ふ」とあり、『禮記注疏』（禮記正義）巻5、曲禮下に引く李巡の注にも、

四海遠於四荒、晦冥無形、不可教誨。故云四海也。海者晦也。言其晦暗無知。

とある。さらにはまた『毛詩注疏』小雅「蓼蕭」に引く孫炎の言葉に、

海之言晦、晦闇於禮義也。

とある。つまり、漢の犍爲舍人と李巡、および魏の孫炎の説は、いずれも四海の「海」字を、文化的水準の低さ、および教化することのできない無知蒙昧さに基づくものと考えたわけである。いわゆる中華思想に基づく蔑視感に根ざす捉え方と評してもよいだろう。要するに、海の字は無知蒙昧の憐れむべき異民族が雜居する文化不毛の地、という意味がこめられているとするのである。この説に立脚しても、唐代の瀚海が突厥・回紇等の異民族が雜居する塞外の地の意味として用いられたとしても、全く抵抗感がないわけである。

瀚海が塞外の地の〝大沙漠〟の意味で用いられる場合、塞外の知識の深化と形狀の類似性も看過することのできない要素である。清の齊召南は、

按翰海、北史作瀚海。卽大漠之別名。沙磧四際無涯、故謂之海。張晏・如淳、以大海・北海解之、非也。本文明云、出代・右北平二千餘里、則其地正在大漠。安能及絶遠之北海哉。

と述べている（『史記會注考證』匈奴傳所引）。特に注目すべき發言は、「沙磧　四際涯無し。故にこれを海と謂ふ」という指摘と地理的推理によって〝大漠〟と論ずる點である。後者のような地理的推測が、唐代果たして可能であったかどうかは疑問であるが、瀚海都護府・瀚海軍の設置は、瀚海の意味を再考させる重要な契機となったであろう。さらに塞北から歸還した將士たちの發言によっても、唐代、かなり塞北の風土に對する知識が高まっていたはずである。唐代盛んであったシルク・ロードの隊商や長安に假寓する西域人を通して、塞北や西域に廣がる大沙漠もかなりよく知られていたであろう。ドイツの地理・地質學者リヒトホーフェンは、翰海は昔、廣大な湖沼であったが、現在は曠漠たる沙漠に化したのだと推定したという（前引『東洋歷史大辭典』）。この説に立脚すれば、一層瀚海が大沙漠の意味にとられやすくなる。

海と沙漠との形態上の類似性について考えてみよう。大小の沙丘が果てしなく連って、まるで打ちよせる波濤にも

似た光景、あるいは風に従って移動しながら姿を變えていく流沙の現象、はるか一面につづく果てしない不毛の砂礫の大地ゴビタンなどなど……。沙漠を海にたとえることは、いわば自然、かつ直觀的な見方であるといえよう。唐の李林甫撰『元和郡縣圖志』卷40には、西北の塞外の地に「大沙海」という地名をのせる。また同卷の居延海の條に、

卽居延澤。古文以爲流沙者、風吹流行。故曰流沙。

とあり、沙州の條に「流沙卽居延澤也」とある説明なども、海と沙漠・流沙との關連を思わせる。晩唐の詩人張蠙は若いころ塞外に遊び、多くの邊塞詩を書いたが、その「單于臺に登る」詩には、

沙翻痕似浪　風急響疑雷

とあり、「薊北　事を書す」詩には、

度磧如經海　茫然但見空

とある。前詩の「單于臺」は、內蒙古自治區のフフホト市の西にあるとされ、また「薊北」とは、幽州（北京付近）の北の意。「沙翻りて　痕は浪に似たり」は、いわば直觀的な比喩であり、「磧（砂漠）を度るは海を經るがごとく、茫然として但だ空を見るのみ」の句は、廣漠たる廣がりに、海と沙漠との共通點を見いだしている。

他方、邊塞詩の「海」字が、塞外の湖を意味する言葉として頻用されるのも、また事實である。『元和郡縣圖志』卷40、白亭海の條に、

方俗之間、河北得水、便名爲河。塞外有水、便名爲海。

とある記述は、このことを明瞭に物語る。確かに青海（ココノール）、蒲昌海（ロプノール）、蒲類海（バルクル湖）、熱海（イシク湖）などは、いずれも塞外の大湖の意味で「海」字を使用する。そしてこの解釋は、實は〈瀚海は北海なり〉とする説を延命させる效果も持っていた。つまり、北海とは四方の果てにある「北海」ではなく、單に塞北の大湖の

意味と考えうるからである。

前野直彬の前著では、中國人の考えた海を、觀念的な海と現實の海とに二分類している。觀念的な海とは、前述の「四海」に象徴される古代世界觀に基づくものであり、全くの想像上の所産であった。「宇宙のはて、太陽の光も及ばぬ暗黑の地に、まんまんとたたえられた」ものと説明されている。他方、現實的な海としての「西海」は一般に「青海」であるという。柳宗元の「唐鐃歌鼓吹曲十二篇」其十の詞書に「李靖滅吐谷渾西海上」とあり、詩の本文に、

吐谷渾盛彊　背西海以夸

とある西海は、確かに青海であろう。[6] しかし唐詩にあっては、觀念的な海と現實の海とが混同して用いられるのが現狀である。たとえば、李白の「古詩」（其十一）に、

黃河走東溟　白日落西海

とある「西海」は、西の果てにある觀念的な「西海」である。ちなみに、『新唐書』卷40、地理志には、北庭都護府の下に「西海」縣の名が見える。

結論的にいえば、邊塞詩に頻出する「海」の字には、

①異民族の雜居する塞外の地―文化的不毛のもたらす暗黑の世界―

②海のような廣漠たる大沙漠

③塞外の地にある大湖や巨澤

④世界の果てにあるとされる「北海」「西海」のイメージ。

の四つの意味があり、それが相互に關連しながら使用されていると思われる。瀚海という言葉は、結局のところ、①を核としつつ、具體的には②、もしくは③・④の兩者と考えられ、次第に（④）→③→②の解釋に移行しつつある、

というわけである。

ここで、前引の岑參と王維の作例を除いた瀚海の用例をあげて考えてみたい。

ⓐ瀚海百重波　陰山千重雪（太宗「飲馬長城窟行」）

ⓑ蕭條清萬里　瀚海寂無波（李白「塞上曲」）

ⓒ孤城當瀚海　落日照祁連（陶翰「出蕭關懷古」）

ⓓ校尉羽書飛瀚海　單于獵火照狼山（高適「燕歌行」）

ⓔ旄竿瀚海掃雲出　氈騎天山蹋雪歸（皎然「塞下曲」）

ⓕ曾聞瀚海使難通　幽閨少婦罷裁縫（無名氏「回紇」雜曲歌辭）

ⓐとⓑはともに「波」の字を用いるが、用法がやや異なるようである。ⓐは陰山山脈に對する塞外の湖の名として用いているらしい。ⓑの李白の詩は、王琦の注に「蓋し太宗の武功の盛を追美して作るなり」とあり、唐の太宗が突厥に雪辱して凱旋したことを踏まえているという。従ってⓑにあげた詩句は、異民族の横行する塞外の地が完全に制壓されて、全く波ひとつたたない平和な狀態になったことをいう。この瀚海は胡地の總稱と考えてよい。武部利男『李白』（筑摩世界古典文學全集）では、「ゴビ沙漠をいう。一説に、バイカル湖」とするが、この場合、〃一説〃を注記する必要性はほとんどないだろう。「はてしない沙漠地方も今では靜かに治まり、云々」（大野實之助『李太白詩歌全解』）と解釋すれば充分である。[7] もちろん、この瀚海は、沙漠・戰場の兩意をかねそなえた「沙場」とほぼ同じ用例であると考えてよい。沙漠の戰場に平和が訪れたことをたたえたのである。

盛唐の詩人陶翰のⓒの詩句は、詩題の「蕭關」（寧夏回族自治區固原縣の南にあった關所）からも、ゴビ沙漠などを考えるべきであろう。具體的にいえば、甘肅や寧夏のトングリ沙漠やパタンチリン沙漠などを考えるべきであろう。孤

城とは孤立した城塞の意で、西方の異民族との前線基地を指す。祁連は祁連山脈、ほぼ甘肅と青海兩省の省境をなす。

高適のⓓについては、中國社會科學院文學研究所編『唐詩選』は、瀚海を「沙漠」の意味とし、

此處瀚海・狼山都泛指與敵軍交戰地方、非實指。

と述べる。傾聽すべき説である。前引の武漢大學中文系に成る『新選唐詩三百首』では、狼山を「狼居胥山」（前出）のこととするが、この場合もやはり異民族との交戰場所として、霍去病ゆかりの山名を用いたにすぎない。ちなみに、同書では瀚海を「大戈壁（ゴビ）」とし、ここでは内蒙古自治區の大沙漠とする。(8)

ⓔの用例は「天山」との對（つい）で注目され、天山の北側のジムサに置かれた瀚海軍のことを思い起こさせ、ⓕの「回紇（ウイグル）」詩では、瀚海都督（護）府との關連を想起させる。ⓔはともかく、ⓕは異民族の住む塞外の地、特に沙漠地帶の意味であろう。

このように見てくると、唐詩の瀚海は、前出の岑參やこの李白・陶翰・高適・無名氏（「回紇」）の作品では、ほぼゴビ沙漠、廣大な沙漠の意味にとることができるだろう。しかし太宗の用例などもあって、なお統一しがたいのが現狀である。一方、瀚海という詩語が、漢の霍去病將軍の出陣以來の、長い西北異民族との戰いの舞臺、いいかえれば、沙漠の戰場としての意味を次第に色濃く持つようになった點は注意されてよい。

(4)　邊塞詩中の海字の用例

ここで、海の字を用いた邊塞詩中の語彙について、、前に指摘した①②③④の意味と關連させながら檢討を加えたい。中唐の邊塞詩人李益の「塞下曲」には、

伏波惟願裹尸還　定遠何須生入關
莫遣只輪歸海窟　仍留一箭射天山(9)

とある。伏波とは伏波將軍馬遠、また定遠とは定遠侯班超のこと。この詩は、戰死を恐れずに勇猛に戰い、一人の敵さえ逃げて歸ることを許さず、なお一部隊を留めて邊境の守備にあたるべきことを歌う。詩のなかで最も興味深いのは、第三句「只輪（一只戰車）をして海窟に歸らしむること莫かれ」の「海窟」という言葉である。まず先行諸注として四書の說を列擧する。

㋑本指海中動物聚居的洞穴、這里指少數民族聚居的地方、有蔑視的意思。

（中國社會科學院文學研究所古代組他『唐詩選注』）

㋺指當時敵人所居住的瀚海（沙漠）地方。

（中國社會科學院文學研究所編『唐詩選』）

㋩指西北內陸湖、這里指敵人老巢。

（前引の武漢大學中文系編『新選唐詩三百首』）

㋥海、瀚海、卽沙漠。海窟—沙漠中的帳篷、指當時敵人所居住的沙漠地帶。

（蔡啓倫『唐代絕句選』）

四書とも、海窟が敵の本據地を意味する點では、ほぼ共通する。ただ海字の解釋に關しては、㋑が海、㋺と㋥が瀚海（沙漠）、㋩が內陸湖とする。私はすでに(3)章で邊塞詩の海字には、①異民族が雜居する塞外の地、②大沙漠、③塞外の地にある大湖や巨澤、④世界のはてにある觀念的な海等の意味があり、相互に關連しながら用いられていると述べた。海窟の海が本來、どの意味を持つかは別として、邊塞詩の海が、ほぼ①②③④の意味で解釋できることがわか

る。

李白の詩（「鄴中贈王大、勸入高鳳石門山幽居」）に、

君王制六合　海塞無交兵

とある「海塞」は、久保天隨『李太白集』（續國譯漢文大成）に「海は國の邊境、邊塞といふに同じ」とある通りであろう（六合は天下の意）。大野實之助『李太白詩歌全解』にも、「邊塞と同じ」とある。[10]「海塞」とは非常におもしろい言葉であるが、要するに、異民族との交戰の舞臺となった塞外の地（にある城塞）を廣く指す①の用例（もしくは②）と考えてよい。

陳子昂の「崔著作の東征するを送る」詩に、

海氣侵南部　邊風掃北平

とある「海氣」の語も注目に値する。則天武后のとき、朝廷は反亂を起こした契丹族を征伐に向かわせたが、その時、武三思の幕僚として從軍した著作郎崔融を見送った詩である。目的地は幽州（北京付近）の北である。高木正一『唐詩選』（朝日・中國古典選）では、

海氣は、北海、つまり今のバイカル湖附近から立ちのぼるあやしい空氣。

と注し、その譯文に「北海から立ちのぼるあやしい氣が南方のわが中國の軍營へと侵入し、云々」とある。しかし「海」をソ連領のバイカル湖と關連づけるのは、契丹族の根據地や崔融の赴いた北平（北京付近）との距離を考えると、やはり問題となるだろう。これに對して、目加田誠『唐詩選』（新釋漢文大系・明治書院）の注には、

四夷塞外の地をすべて海という。塞外の氣。契丹の侵入をいう。

とあり、通釋では「北狄の氣」と譯している。傾聽すべき說である。[11]この海氣は、まさに異民族の雜居・橫行する塞

外の地（①の意）から立ちのぼる氣、いいかえれば北狄契丹の氣と見なすべきであろう（ただし、海氣は一般には蜃氣樓の意味で用いられることが多い）。ちなみに、周朴の「塞上行」詩に、

秦築長城在　連雲磧氣侵

とある「磧氣」は、海氣との關連で興味深い。

次に「海風」について考えてみたい。『唐詩選』には、三例[12]あるが、次の二例が著名である。

①烽火城西百尺樓　黃昏獨坐海風秋
　更吹羌笛關山月　無那金閨萬里愁（王昌齡「從軍行」）

②天山雪後海風寒　橫笛偏吹行路難
　磧裏征人三十萬　一時回首月中看（李益「從軍北征」）

①は、たそがれどき、高い物見やぐら（戍樓）の上にひとり坐り、吹きよせる「海風」にすでに秋のけはいを感じとることをいう。また②は、天山に雪が降りつもると、「海風」が一段と寒さを加える意である。兩者とも、戸崎允明の『箋註唐詩選』以來、ほぼ「海」を青海、もしくは塞外の湖とする說がほとんどである。これは唐代、青海附近が吐蕃や吐谷渾との激戰地として知られ、

青海戍頭空有月　黃沙磧裏本無春
（柳中庸「涼州詞」）

暮雲連青海　陰雲覆白山
（令狐楚「從軍行」）

等、邊塞詩に頻出する湖であることによって、かなり說得性をもつ。杜甫の「兵車行」の「君見ずや　青海の頭（ほとり）　古

來　白骨　人の收むる無し、云々」の句は特に有名である。①の場合、王昌齡の「從軍行」六首の一つに、「青海長雲暗雪山　孤城遙望玉門關」とあることも、やはり有力な傍證になるだろう。ただし、たとえ一種の連作であったとしても、樂府詩の場合は徒詩より、個々の詩がそれぞれ半獨立の狀況にあるのが一般的である。從って決定的な理由にはならない。また②の詩では、天山が祁連山脈を意味する場合もある（『漢書』霍去病傳の顏師古注）ことを考えると、山脈と青海との距離が近くなり、やはりかなり說得性をもつ。

では、ほんとうにこの「海風」に、他の解釋を試みる餘地がないのであろうか。青海、もしくは塞外の湖からの風と規定する方が、邊塞詩の詩的イメージとして最も妥當なのであろうか。王昌齡の詩の「海風秋なり」には、おそらく悲秋の季節を迎えて望鄕の思い（特に妻に對する思慕）が一層かきたてられる、あるいは故鄕に歸れぬまま空しく時が過ぎていくことをしみじみと感じる等のさまざまな心情がこめられているだろう。さらにはまた、王涯の「塞上曲」に、

塞虜常爲敵　邊風已報秋

と歌われるように、海風が秋の氣配をもつことは、とりもなおさず敵の來襲する時期の訪れを暗示している。匈奴はしばしば秋に來襲したので、秋の訪れとともに異民族に對する防御の體制をととのえる、いわゆる防秋への連想も當然含まれるであろう。從って「邊風已に秋を報ず」の〝邊風〟という言葉に改めて注目せざるをえない。邊塞を「海塞」と呼んだ例も思い出される。そして海の字に〈異民族の雜居する塞外の地〉の意味があることを考えると、海風はほぼ〝邊風〟と置きかえられる言葉ではないか。多少ニュアンスに違いがあるとしても……。他方、青海、もしくは湖から吹きよせる風というと、なぜか一種の淸爽感がこもり、陰鬱な風土としての塞外のイメージとややそぐわないようにも思われる。王昌齡詩の「海風」が、たとえば、

秋風四面足風沙　塞外征人暫別家
（張祜「破陣樂」）

古塞一聲笛　長沙千里風
（劉威「塞上行」）

のように、沙漠を吹きぬける風、あるいは沙まじりの風であっても、少しも邊塞詩の表現としておかしくないばかりか、むしろそうした嚴しい環境こそ、實は出征兵士の勞苦を思いやる要因となるのである。

李益の詩の「海風寒し」においても同樣である。邊塞詩には、塞外の嚴寒の風土を描くことによって兵士の勞苦や望鄕の思いをしのぶものが多い。たとえば王翰の「涼州詞」の、

秦中花鳥已應闌　塞外風沙猶自寒

などは、「秦中」（長安周邊）と「塞外」との氣候の差異を通して、出征兵士の多大な勞苦や熾烈な望鄕の情が自然に想像されるわけである。平野彦次郎著『唐詩選研究』には、王昌齡の「海風」について、

沙漠地方の風をいう。ただしこの詩は、後章に「青海長雲」の語があるので、この海風を、青海の邊の風と解してもよい。

と述べ、李益の詩に對しては、「沙漠地方すなわち胡地の風を稱す」とある。また富壽蓀選注『唐人絶句評注』には、王昌齡の「海風」に對して、

寒風自瀚海（沙漠）而至者。

とする。いずれも興味深い說である。ちなみに、服部南郭の『唐詩選國字解』では、李益の詩の「海風」はそのまま海風と譯しているが、王昌齡の詩に對しては、海風の字を含んだ第二句を、

ひとり坐していれば、夷の方から、秋風が吹來て、ものすごいことぢゃ。

と譯している。明らかに海の字を〝異民族の住む塞外の地〟とする立場である。(1)塞外の湖から吹きよせる風、青海から吹く風、(2)沙漠を吹きわたる風、塞外の地を吹く風、沙漠から吹きよせる風では、やはり詩的イメージに大きな異同があり、決して輕視してよい語彙ではない。

このようにみてくると、

胡兒吹笛戍樓間　樓上蕭條海月閒

（宋濟「塞上聞笛」）

畫角悲海月　征衣卷天霜

（李白「出薊北門行」）

の「海月」も改めて問題となろう。ちなみに、後者の李白の詩の「海月」については、大野實之助『李太白詩歌全解』が「沙漠を照らす月」と譯し、武部利男『李白』（前引書）が「ゴビの沙漠の月」と譯していることをつけ加えておきたい。この場合も「邊月」との關連が注意される。

邊塞詩の「海」字はそれ自體多樣な意味を持ち、邊塞詩全體のイメージづくりに不可缺の多くの詩語を形成する。その一つ一つに對して、今後、愼重な吟味と檢討を重ねていかなければならない。[13]

注

(1) 沙場については、松浦友久〈「沙場」考〉參照（研文出版刊『詩語の諸相—唐詩ノート』所收）。

(2) 平凡社『東洋歷史大辭典』や同『アジア歷史事典』のカンカイの條。前者は櫻井益、後者は長澤和俊の執筆。一九六五年新編本『辭海』（中華書局）「瀚海」の條。

(3) 『周禮』卷33、校人の鄭玄注に「四海は猶ほ四方のごときなり」とある。

(4) 蓬については、拙稿「曹植吁蓬篇考—轉蓬・飛蓬の詩的心象をめぐって」に詳しい（早大『中國古典研究』第20號所收）。

(5) 吉川幸次郎全集巻19所收。

(6) 隋代には、青海附近に「西海郡」が設けられている（『隋書』巻29、地理志上）。

(7) ただし、久保天隨『李太白集』の字解では、瀚海は「北海の名、今のバイカル湖だらうとする説もある」とある。

(8) 劉開揚著『高適詩集編年箋注』に、「漢以後人稱沙漠爲瀚海。周祈《名義考》「以沙飛若浪、人馬相失若沈、視猶海然、非眞有水之海也」とある。

(9) この第四句は、唐の名將薛仁貴の故事を踏まえる。詳しくは『舊唐書』巻83の本傳參照。

(10) この李白の句は、曹植の「贈丁儀王粲」詩に「皇佐揚天惠、四海無交兵」とある句を踏まえるが、海塞は「四海」（天下）と全く同意ではないだろう。

(11) 田森襄編『中國の名詩鑑賞4　初唐』にも、『爾雅』の説を引き、「海氣の海は恐らくこの意味（九夷八狄七戎六蠻）に用いて、契丹の氣を指しているのであろう。契丹は北海のあたりに住んではいたが」とある。（　）の中は筆者補充。

(12) 本稿に引用するほかに、王昌齡の五律「胡笳曲」に「海風」の語が用いられ、服部南郭の『唐詩選國字解』には、「聲がすみ上って風にしたがって、胡の居るまで聲がほそうすがれて、きこゆるのである」とある。

(13) 李白の「行行且游獵篇」の「海邊」について、上海古籍出版社刊『李白詩選注』（李白詩選注編選組）には、「海、瀚海卽沙漠」とする。